

会員新刊紹介

乾澄子著

『源氏物語の表現と展開 寢覚・狭衣の世界』

本書は、『源氏物語』から『夜の寢覚』『狭衣物語』、さらに中世王朝物語へ至る物語の表現史を論じたものである。物語史と和歌史の交渉を考え、さらに物語の本質を追求する上で、著者の和歌的表現に対する感覚の細やかさ・鋭さは、今後とも有力な手段となるであろう。なお、Ⅱ・Ⅲは著者の学位論文を基としたものである。以下、内容を紹介する。

Ⅰ 『源氏物語』と歌ことばの表現史

第一部は、『源氏物語』第二部の贈答歌に注目し、光源氏の関与する贈答歌が激減し、女性からの詠歌が増加する状況から、「光源氏非在の世界」が増大する過程を論じている。第二部は、『源氏物語』の目新しい歌枕・歌語が、和歌の世界で評価され、また、『狭衣物語』『浜松中納言物語』『松浦宮物語』などの物語に影響を与え、『新古今集』以後の勅撰集に歌語として用いられる過程を、物語史と和歌史の交渉の様相として検討している。

Ⅱ 『夜の寢覚』の原作と改作の世界

第一部では、『夜の寢覚』の原作を、女君の環境、世間の認識に着目して考察する。女君は、天人の予言通り「憂き」宿世に翻弄される。世間の価値観に添った生き方を願う彼女を裏切るのは、彼女の女性としての美しさ・セクシュアリティであり、『源氏物語』で描かれた、男性中心の社会体制の中で生き方を模索する女性たちの姿を、『夜の寢覚』は、女君一人に集約して主題化している。末尾欠巻部分に至る、帝の懸想を拒否し、摂関家の女として生きる女君の生き方には、同時代の影響を見ることができ、第二部では、原作の「憂き」女君と、改作の「憂きに耐へたる」女君に着目する。原作の女君を苦しめる女一宮・大皇宮などを消去して、主題を転換するところに、改作本の特徴を見る。

Ⅲ 『狭衣物語』の表現と中世王朝物語

第一部では、「物語世界を紡ぎ出していく推進力としての和歌」に着目する。『狭衣物語』では、『源氏物語』より一歩進んで、『枕草子』にも通ずる新しい歌語・歌枕を創出し、また、作中和歌の反復使用により歌語としての認定を図り、さらにその歌句が女君たちの形象としてのみならず、場面のインデックス的な働きをして物語を展開する推進力となる状況を考察する。第二部では、

『とりかへばや物語』の「世」に関わる語に注目する。男女の役割の交換によって、身体的・社会的な性差を持つ「世」との関わり方を描くことでは効果があったが、本来の性に戻る中で、当時の社会制度に対する受容的な態度を示し、秩序の破壊者とはなり得ない女君の姿を検討する。『小夜衣』は、先行物語の引用の様相を検討し、王朝物語の型の継承・表現面での再構築の巧みさがこの物語の読み継がれた理由であるとする。

（二〇一五年五月二〇日刊、翰林書房、A5判、四八四頁、

一一〇〇〇円＋税）

（宮田 光・東海学園大学名誉教授）

大井田晴彦著

『伊勢物語 現代語訳・索引付』

本書は、「初めてこの物語に接する一般読書人から、古典文学を専攻する研究者まで、幅広い読者を想定して編集した。（「凡例」より）」と冒頭に編集の方針が示される。

この方針を実現するためには、堆く積み上げられた研究成果を分かりやすく平易な表現で説明する必要があるが、本書はその難しい課題をさらっとクリアして見せてくれている。

『伊勢物語』百二十五の各段について、本文、現代語訳、語釈、補注、鑑賞、解説がなされ、末尾に付録、索引が収められており、至便だ。

全編を通して、大きな文学史の流れの中に『伊勢物語』を位置づける視点が示される。『源氏物語』や『大和物語』といった和文脈とのつながりにとどまらず、『淮南子』、『本事詩』、『白氏文集』といった漢文脈との関わりにも縦横に言及されている。

他作品との連接や影響関係、あるいは隔たりの具体相によって、『伊勢物語』がどのような独自の表現世界を

獲得したかが説明されているのである。古典作品を丁寧に読みこなした確かさの為せる業であろう。

特に「鑑賞」は、表現のダイナミズムを味わう手掛かりが詰められていて読み応えがある。『伊勢物語』の主題が「みやび」とされるのは周知といえようが、本書ではその「みやび」の諸相が「和歌」と不可分に見据えられている。印象的であるのは、その読解が登場人物の心情に寄り添ってなされている点である。

例えば十六段「年だにも」の和歌について「有常には見えていなかった老妻の思いを的確に汲み取り、かつ有常を優しく論ずるものとなっていよう。(四四頁)」とされる。一首の和歌を詠出することが、それぞれの人物の心の形をいかに描き得ているかを突き詰めなければ出てこないコメントだ。

「みやび」の諸相を照らす点では、十四段の男の和歌について「残忍な凶器でさえある(三八頁)」とされ、「残酷さや不寛容さ、自らの価値観と相容れぬものは容赦なく退ける「みやび」の否定的な側面が語られているといえよう(同)」と述べる。鮮烈である。

文学作品は血の通った人間の心を描いたものであるのだという作品理解の根本について、研究の現在を踏まえたところで、誰にでも分かるように説かれている、偉業

というべきである。

〈令和元年十月十一日刊、三弥井書店、A5判、三三五頁、

四五〇〇円＋税〉

(亀田夕佳・愛知淑徳大学等非常勤講師)

田島優著

『あて字の素姓』

—常用漢字表「付表」の辞典—

本書は、常用漢字表における「付表」の成立過程とその改定の流れを記述する第一部『付表』の成立と発展』および、その「付表」にある一一六の「あて字」の表記がどのように定着したかを紹介する第二部「あて字の素姓（『付表』の辞典）」からなる。本編の紹介に入る前に、本書のいう「あて字」について補足しておきたい。本書の「あて字」は、いわゆる「熟字訓」も含めて「あて字」とよんでいる。

本編の紹介に入ろう。まず第一部では、常用漢字表における「付表」の成立から現在に至るまでの変遷過程が克明に描かれる。国語表記において「あて字」は広く日常的に用いられるものであるし、過去の国語表記においてもそうであった。特に、平易な日本語文章をめざし、漢字の使用制限を旨とした当用漢字表が告示され、「あて字」の使用が認められなくなってから、「付表」が制定・整理されていく過程は、我々の普段の国語表記生活に密接に関係しており面白い。また、都道府県名の表記

にかかる教育上の観点からみた「付表」の整理などは、国語教育史の観点からも興味深い。国語教育が国語表記に大きな影響を及ぼした可能性があることは言うまでもないが、制度の面からの詳細な報告は、私のような国語表記史に興味を持つ者にとって非常に有益な資料となるう。

第二部では、常用漢字表「付表」にある一一六の「あて字」について、その表記の定着過程がひとつひとつ紹介される。第二部冒頭の「注記 各語の歴史に入るにあたって」での使用資料の説明も親切である。国語史に明るくない人も、資料調査が初心の人も、辞典類を手元に置かずとも楽しめる。また、これから国語史を学び始める人にも、その資料に関する説明がしており便利である。

ここで取り扱われる「付表」は、常用漢字表に付されるものであるから、そこに登場する語そのものは日常的に使われるものとなる。あまりにも日常的に用いているため、「明日」や「時計」などと本書を読むまで「あて字」であると気づかなかった語も多かった。改めて我々の表記生活の奥深くに「あて字」が入り込んでいることに驚く。現在使われている語の表記が奈良時代から変化していかないものもあり、興味は尽きない。「あて字」の歴史

をひもとくと、表記は語との結びつきに大きく依存する、という当然のことにも改めて気づかされる。

「付表」成立から、それが発展していく過程の詳細な記録と、一一六に及ぶ「あて字」の歴史ひとつひとつを追う著者の調査は綿密で丁寧である。国語史を学ぶ人のみならず、国語教育に携わる人も楽しく読めるのではないだろうか。「なぜこのような読み方（書き方）をするのだろう」という私の素朴な疑問に、明快にこたえてくれる一冊を座右に得た。ぜひ一読を薦めたい。

△二〇一九年十一月五日刊、風媒社、四六判、二二三頁、
一七〇〇円＋税

（坂上優太・名古屋大学大学院博士前期課程修了）

阿部泰郎著

『中世日本の王権神話』

本書は、阿部泰郎氏が国文学会に衝撃を与えた初期の論考を中心に成っている。従来の「神話」研究の枠を大きく逸脱し、日本の中世王権神話の歴史的な変遷の全貌を俯瞰しつつ、時に個別のテクストに寄り添いながら描出した本書は、最近までの新しい論が膨大な注にも生かされており、この分野の集大成的なものとなっている。

本書は、王権神話という枠の中にかたどられた世界の片鱗を様々な角度から照射したものである。それは、権力者と歴史と仏教に関わる事実を淡々と述べるものではなく、人々の想像力が王権をめぐっていかに掻き立てられ、その欲望がどのように具現化されていったのかを記述する人間の営みそのものへの視点であり、本書を読んだ人は、おそらく欲望の行方を語るその論の切り口そのものに魅了されるだろう。そのことは、本書において新たに書下ろされた序章と終章に明確に示されている。二神約諸神話が王権に関わる寺社縁起から武家、芸能者の間へと様々な手の手を経て、それぞれの論理に即して変わるさまは、本書が「王権神話」と銘打ちながら、それ

が片時も王権を支えるリジットな論理として固定化されることなく、その時々々の権力者を支えるものとして揺らぎながら、変容していくものであることをはからずも暴露するものであった。慈円という個人の身体を通して夢想された神話は、元寇という大きな歴史の出来事が神話を再生するにあたって、現実的な必然性から受容されたものであり、その当時、生きていた人々にとっての個人を超えた大きな物語となりえたのである。しかしながら、そこに小さな物語がなければ、人々は、神話上の契約の物語を自分の物語として受け止めることはできない。良くも悪くも個人の身体の延長上に、中世の王権神話があることを本書は示唆しているともいえるだろう。そこには、批判もあるかもしれないが、その事実を知ることともまた人間と社会を研究する者にとって必要なことのように思う。

本書は、宗教儀礼、幸若舞曲、中世日本紀、寺院縁起という中世日本の王権と関わる世界を寺院調査による膨大な資料の博搜、発掘によって再現したことはいうまでもなく、それが説話世界や謡曲を含む芸能と密接に関わるものであることを示している。それは、文学の背景に横たわる豊かな世界を圧倒的なスケールをもって現したものであった。王権神話がかつての研究において、その

始原を探る糸口として俎上に載せられてきたのに比して、中世から近世にかけて創られていく神話の動態を描き出してみせたことは、王権神話研究において重要なパラダイムシフトであったように思われる。また、歴史学者や宗教学者の目途とする政治的な社会分析や宗教儀礼の復元という枠組にとどまらない幸若舞曲などの芸能の領域にまで踏み込むその手法は、その他の同様の資料を俎上に掲げた研究とは異なり、王権神話そのものが有する物語性、虚構性の本質をも垣間見せてくれている。

〈二〇二〇年二月二十八日刊、名古屋大学出版会、
A5判、四五二頁、五八〇〇円＋税〉
(中根千絵・愛知県立大学教授)